

『お気に召すまま』における日常生活と機知

大阪芸術大学 文芸学科 教授 団野 恵美子

16世紀から17世紀にかけて、約150年もの間、イギリスでは女性向けの日常生活の手引書、女性の地位に関する論説や説教集、礼儀作法書が出版されてきた。父権制社会における女性の立場や結婚について、家庭生活手引書などの影響があることは、エリザベス朝演劇の端々に明白である。

シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)の『お気に召すまま』(*As You Like It*, 1600)は、トマス・ロジの『ロザリンド』を材源としながらも、伝統的な牧歌劇に現実の問題を組込んで諷刺的な色彩を帯びさせている。ヒロインであるロザリンドが羊飼いの若者に変装して、オーランドーの恋の手引きをしながら、宮廷の権力闘争を収め、4組の恋愛を成就させる大団円まで、理想と現実、人工と自然の差異を提議する劇となっている。

1. 劇の概要と特徴

劇の冒頭で揉め事の種は現れている。弟フレデリック公爵に地位を奪われた前公爵は、廷臣たちとアーデンの森でロビンフッドのような生活を送っており、娘のロザリンドはフレデリックの娘シーリアと仲良しの従妹同士として宮廷に留まっている。ボイス家の3人兄弟の三男であるオーランドーは、長男のオリバーに疎まれ、紳士教育を受けていない自らの生活に嫌気がさしている。

フレデリックお抱えの力士が、オリバーの陰謀で殺害することも厭わずオーランドーと試合をするが、オーランドーが打ち負かす。ロザリンドとオーランドーは互いに恋に落ちたものの、オリバーの殺意と、姪を憎むフレデリックの追放命令により、二人ともアーデンの森に逃亡する。

逃亡者にとって理想郷であるはずの森は、冷たい風が吹きすさび、食料として鹿を射止めることも必要な現実面を見せている。ロザリンドとシーリアは女性二人だと危険だとわきまえており、ロザリンドは男装し、シーリアは汚れた顔の羊飼いの娘に変装の上、道行の娯楽と安全のために道化タッチストーンを連れ、宝石とお金を持ち出して、住処として牧場付きの家を購入する。オーランドーは何も準備せず森に入り、老僕アダムと共に、食料も火も準備せず山賊のように前公爵の宴に乱入するが、論され温かくもてなされる。オーランドーは森の中で、飢餓を経験するだけでなく、礼儀の欠如と教養不足を痛感することになる。

男装したことに気付かれないのを逆手にとって、ロザリンドはオーランドーの恋煩いを治療するという口実で、自分に愛を告白させて楽しみ、タッチストーンは田舎娘オードリー、羊飼シルヴィアスはフィービ、フィービは男装のロザリンドに恋をする、というように恋人たちの愛についての言説が、様々な形式で描かれる。

男性が抱く幻想と、女性が望む現実の姿について、道化も羊飼いも、機知と本音を重ねながら恋の偶像崇拜を

正していく。ライオン襲撃から救われたオリバーが改心して、一気にシーリアと結ばれ、森に入ったとたん前非を悔いるフレデリックが兄に領地を返すなど、4組のカップルが誕生することが社会の調和を取り戻す構成になっている。

2. 機知と現実

シェイクスピアの女性たちは、恋愛遊戯の言葉や機知による巧みな扱いに影響を受けにくい。フィービはペトルカ風的美辞麗句を並べるシルヴィアスに、「あたしの目は突き刺すようにあなたをみている、あなたを傷つけはしない、そもそも人の目に誰かを傷つける力なんてあるわけがない」と言って現実感を失わない。男装したロザリンドも「レアンダー、あの男も、たとえ恋人のヒーローが尼になろうとなるまいと、何年も気分よく生き延びたでしょうよ」と恋のために死ぬという詩の虚構を解体する。

宮廷人でない登場人物が、日常生活に根差した信念からの言葉を持っている。コリンは「宮廷じゃ挨拶がわりに手にキスすると言ったよな。そんな作法は不潔だよ、宮廷人が羊飼いだったら」と、タールで汚れた現実の手を示し、機知でやりこめようとするタッチストーンに「宮廷仕込みのあなたの知恵には敵わない、もうやめる」と言って自分の領域を守っている。機知合戦では負け知らずの道化も、日常生活の真実に対しては、頓智の切れも鈍くなってしまふ。

3. 求愛の教育

典型的な恋煩いの証拠として、シェイクスピアの喜劇では、叙情詩の形式で描かれる。その言葉は、報われない恋や薄情な恋人を責める常套句から成り立っている。喜劇では、この没個性的な言葉は揶揄され、笑いとともに共感を得るよう仕向けられる。

オーランドーは枝に「世にも麗しロザリンド」と愛の詩を掲げて回るが、すぐ道化に「雄鹿と雌鹿がいい感度、そして探せロザリンド」と機知でロマンスを動物的な欲望の位置へと引き下げる。これにはジェイクイズも加担しており、「ノアの洪水がまた起きようだ、こんなカップルが次々と箱舟にやってくるのはね」と言って、恋人たちを番いの動物に譬えている。

ロザリンドは「女は娘のうちは5月だけれど、人妻になれば雲行きが変わる」と、オーランドーの女性への偶像崇拜を揶揄しつつ、現実のロザリンドを愛するように仕向けている。同時に、そのロザリンドはシーリアに自らの男装を嘆くたびに、その虚構性を示すことになる。